

農事組合法人「かわい」 代表理事

小原一泰さん

明日へ向かって駆ける

農業法人の経営者は語る

「地域みんなで立ち上げた法人。地域の人の負担を減らし、原点に立ち返り『誰のためにやるのか』を考えて今後もやっていきたい」と話すのは、福知山市三和町川合地区の農事組合法人「かわい」代表理事の小原一泰さん(70)。

市南東部、由良川支流の川合川沿いに水田が広がる中山間地域。地区内の6集落それぞれに営農組織があったが、1枚の田んぼが10畝に満たず、畦畔(けいはん)も多い農地を維持していくのが難しくなったことから、2002年に「川合地域農場」つくり協議会を結成。大型農機を導入し、機械の共同利用や農作業受託を中心に取り組んできた。

しかし、「農家には、作りたい物は作りたいだけ作ってほしい」との思いから、作業や施設の共同化で無駄なコ

ストを減らし、農地を維持していくことを支援するため、J Aや行政の指導を受けて協議会の作業・園芸部会を独立させ、09年1月に同法人を立ち上げた。

設立当初は、6畝の農地で始めたが、現在では20畝を超える農地を預かる。現在の面積を維持するため、水稻を経営の柱にする。由良川支流は水温が低く、米の生育には4か月ほどかかるが、おいしい米を作るのに適した気

候。自慢の米で作った米粉を特産品として販売する。また、丹波地方の特産である丹波大納言小豆を4畝で生産している。昨年からはじめた「万願寺甘とう」は、地元的女性10人が出荷調整作業を行い、J A京都にのくに出荷する。規格外品を活用して「万願寺みそ」を試作するなど、新たな取り組みも始めている。試作した「万願寺みそ」は地元でも評判が良く、今後は、特産品として販売するための加工施設の整備

も計画。これからの法人の経営には、地元産の農産物をいかに売っていくかが重要と考え、情報の収集には余念がない。



▶ 法人を支える小原一泰代表(左)と土佐祐司理事(右)

全ては地域のために

歯止めがかからない。そのため、行政と協力し「ターンの受け入れに力を入れていく。空き家バンクを利用し、移住コンシェルジュにも注目されるようになってきた」と小原さんは話す。

「法人の事務所は、地域の人が集うサロンとして位置付けて、多くの人が気軽に集い、いろいろな情報も集める場として利用していきたい。また、地域の活性化のためには、女性の力が不可欠だ。万願寺甘とうの面積を増やして、女性にも手伝ってもらおうことで、地元の雇用機会を提供し、法人経営の柱の一つとしていきたい」と、意欲を語る。

■法人所在地 福知山市三和町上河内580の2。(電) 0773(59)2131。

■法人概要 2009年1月設立。理事7人、監事1人、オペレーター10人(繁忙期)、パート10人(出荷調整作業時)、組合員150人。経営面積(水張り面積) 16・1畝(コシヒカリ)7・8畝、新羽二重糯1・9畝、加工用米「京の輝き」1・3畝、小豆4・2畝、万願寺甘とう800本他。農機具 トラクター6台、コンバイン5台、田植え機2台、車載車1台、トラクター2台、フォークリフト2台、米乾燥調製施設1式(色彩選別機2台、穀物乾燥機10台含む)、米用保冷庫2台など。